

## 第6章 歌おう

呼び戻すことが できるなら  
僕は何を惜しむだろう

布施明「シクラメンのかほり」より

### 「夏は来ぬ」の誤解

青い空に白い雲が浮かび、身も心も開放的になると、歌いたい歌があります。それが「夏は来ぬ」です。「♪なつーは きぬー」と、さわやかに気持ちよく歌えば、心地よい風が吹いて来ます。

「うの花のほふ垣根かきねに、時鳥ほととぎす早もきなききて忍音しのびねもらす 夏は来ぬ。」

## うの花のほふ垣根に、

『万葉集』には、「卯の花」を詠んだ歌が二十四首ある。そのうちの十八首は「時鳥」ときどりとともに詠まれている。

「♪うーのはなーの」と歌い出す「卯(う)の花」は、基本的には茎が空洞になっていることから「空木(ウツギ)」という名前と呼ばれるようになりました。高さ二メートル程度になるユキノシタ科の落葉低木で、ほぼ日本全土に亘って分布し、日の当たる場所に普通に生えています。ウツギは、庭木や生け垣に使われます。五月から七月ごろ五枚の花弁を持つ白い花を咲かせます。陰暦の四月のことを「卯月(うづき)」と呼びます。卯月は「卯の花月」ともいい、卯の花が咲き始める季節という意味です。現在の暦ではおおよそ五月に当る。五月の到来を告げる花です。

この白い花を兎にたとえ、「兎」の古名「卯」をとって「卯の花」ともいわれています。豆腐のしほりかすの「おから」は、「卯の花」の白さに似ていることから「うのはな」という名前がついています。

「うの花のほふ」の「にほふ」は、「良い匂いがする」ではなく、ここでは「あざやかな白が美しく映える」という意味です。「卯の花」といわれる一般的なウツギには香りはありません。

信綱の生家の書斎からはウツギの植え込みも見えます。ウツギは単に農作業の時期を知らせてくれるだけでなく、イネの作柄を占い、豊作を祈願する花として重要視されました。神聖な木であるウツギは、外界から庭や屋敷など内なるものを守る境界木として垣根に用いられるようになりました。ウツギの垣根は『万葉集』にも詠われている日本で最も古い生け垣であり、昔は垣根

といえ、それはウツギの垣根を意味するほど一般的でした。

**時鳥ときどり早もきなせて忍音しのびねせしす**

「忍音」は、「時鳥」がその年に初めて鳴く初音のことです。「時鳥」は、夏になると「特許許可局」や「てっぺん かけたか」と鳴くと聞きなしされることで知られていますが、最初は上手に鳴けません。これが「忍音」で、山里の人々は、その「忍音」を聞くのを楽しみにしていました。「時鳥」は、毎年、五月頃になると南から渡ってくる初夏の到来を告げる鳥。「卯の花」も「時鳥」も田植の始まる季節を知らせてくれます。昔の人々は、卯の花が咲き、ホトトギスが鳴き始めるのを注意深く待っていました。

**夏は来ぬ**

「夏は来(き)ぬ」は、「夏が来(きた)」という意味です。この場合の「ぬ」は完了の助動詞で、「夏は来ない」という打ち消しの助動詞ではない。「夏は来(こ)ぬ」と読めば「夏が来(こ)ない」という意味になる。

**倒置法たうちほうで書かれている**

句読点に注目。「うの花のにはふ垣根に」と、「垣根に」の後に読点があることです。この節は「うの花の垣根にほふ」を倒置して書かれています。「垣根に時鳥が」来たものではありません。

時鳥は「早もきなきて」の方につながります。

〔垣根に明るく照り映えて卵の花が咲いたよ、ホトトギスが早くもやって来て声をひそめて鳴く初音をこっそり聞かせてくれる。その夏が来た〕という意味です。

### ホトトギスの託卵たくらん

「ホトトギス」は、カッコウの仲間で、山林に生息している野鳥ですから、ふつうは人里近くに飛んで来たり、人家の垣根で鳴くことはありません。カッコウの仲間は、他の鳥の巢に卵を産み付ける託卵という習性を持っています。そのためホトトギスは仮親となるウグイスが卵を産む時期を待つて他の渡り鳥より少し遅い五月に日本にやって来ます。

このように見て来ると、どの解説書にも書いてある、「卵の花の垣根に、ホトトギスが飛んで来て鳴く」という解釈は間違いということになります。

◆「夏は来ぬ」は、小山作之助が編集した『新撰國民唱歌 二集』（三木樂器店）で発表されたものなので、文部省唱歌ではありません。

## 感動の金太郎伝説

歌詞の題材は、想像力豊かに作られた「金太郎伝説」です。

金太郎は、足柄山あしがらやまに住む山姥が、雷鳴の中で赤竜の夢を見て生んだ全身真っ赤な、たくましい

男の子。いつもマサカリを持ち、熊、サル、ウサギ、などと金時山で遊び、猛獣と力を競うほどの怪力の持ち主であったという。二十一歳の時、上総国（かづさのくに）から上京する源頼光（みなもとのよりみつ）に見いだされて坂田金時（さかたのきんとき）。「酒田（さかた）」とも「公時（きんとき）」とも書く）の名を与えられ、家臣になった。そして頼光（らいこう）四天王の一人として大江山の鬼（酒呑童子 しゅてんどうじ）を退治したが、頼光の死後、行方が伝えられていないという。（『伝説のふるさと』より）

### なぜ金太郎の体は赤いのか

金太郎の体の赤は、「魔よけの赤」。「子供という意味の赤」でもある。

### なぜ金太郎は「マサカリ」を持っているのか

『前太平記』に金太郎の父は雷様と書いてある。落雷により木が裂けた現象を「雷様は大きなマサカリを持っている」と昔の人は信じた。雷様の子供である金太郎はマサカリを持ち歩いたと考えた。「大マサカリを持つ金太郎」（鳥居清満・安永年間）の絵が残っています。

### 「上総国」はどこの国

上総国は、旧国名の一つ。千葉県中央部を占める。

## 「酒田」とは

南足柄の金太郎伝説は、地藏堂に四万長者といわれた金持ちがあつた。この長者に一人の娘があつた。娘は酒田氏と結婚して金太郎が生まれた。……（『南足柄のむかしむかし』より）。

開成町には昔「酒田村」があつたが、現在は酒田という地名は存在しない。「酒田神社」がある（現・開成町延沢四六五番地）。

開成町の金太郎伝説は、足柄上郡酒田村の豪士で都の莊園なども管理していた酒田義家という者がいた。一族間の所領争いから叔父に殺されてしまった。義家には生まれたばかりの男の子がいた。金太郎である。……（『町史へのいざない』より。大正十二年（一九二三年）七月発刊の『三国伝説』（足柄山の金時）にも当時の伝説が紹介されている）。

## 「頼光四天王」はだれか

源頼光は、平安時代中期の武将。俗に「らいこう」とも呼ばれます。頼光四天王は、渡辺綱（わたなべのつな）、坂田金時（さかたのきんとき）、碓井貞光（うすいのさだみつ）、卜部季武（うらべのすえたけ）。強者の家臣がいたと言われている。

## 「大江山」とは

大江町は、現在の京都府福知山市。大江山の麓に位置する場所で、大江山の鬼伝説の町。ここには鬼退治に向く前に金時が力試しをした「金時踏み倒し杉」がある。さらに山中には金時が

マサカリを研いだ「金時斧研ぎ石」などがある。

西京区大枝沓掛（おおえくつかけ）町には「首塚大明神」がある。この首塚は大江山で退治した酒呑童子の首を京都へ持ち帰ろうとしたが、道端のお地藏さまから不浄な物を都へは持ち込めないとお告げがあり、首が重くなつて金時も運べなくなり仕方なくこの地に首塚を作つたというもの。◆以上は、『足柄山の金太郎』第一部「伝説の謎に迫る」。第二部「全国伝説地巡り」南足柄市郷土資料館館長・笠間吉高。神奈川新聞（二〇一五年十一月二十日から二〇一六年三月二十五日）を参考にしました。「金太郎は実在しないが、坂田金時のモデルと推定される人物は存在した」など興味深い話が沢山書かれています。

## 親の願い

『キンタロー』の歌詞はカタカナで書かれています。「マサカリカツイデ」が正しいのですが、「マサカリカツイダ」のように、間違つた歌詞で歌われる事があります。口語体のやさしい言葉で書いてあり、今までの文語体の唱歌と異なり、子供にわかりやすくなっています。

歌詞の第一節では、お馬のけいこのようすを。第二節では、すもうのけいこのようすを歌っています。「ハイ、シイ、ドードー、ハイ、ドードー」、「ハツケヨイヨイ、ノコッタ、」には、子供は元気に外で遊んでほしいという親の願いが込められているように思います。

## 「足柄山」はない

神奈川県には、「足柄上郡」「足柄下郡」「南足柄」という地名があります。小田急線には「足柄」という駅があり、御殿場線にも「足柄」という駅があります。金時山のふもとの駅です。

歌の二番に出てくる「足柄山」という名前の山はありません。しかし、歌った誰もが疑問を持ちません。それほど、違和感なく歌われ、歌い継がれています。作詞をした石原和三郎は、後日「足柄山」がないと知った時、どんなに驚いたことでしょう。

## 金太郎と金時のキーワードが「足柄山」

「足柄山」で熊と相撲を取っていた金太郎と、「足柄山」で源頼光に見いだされ都に上って坂田金時と名を改め、大江山の鬼退治をしたという史上の武将を結びつけるキーワードが「足柄山」かもしれません。金太郎伝説には夢があります。

## 伝説の舞台「金時山」

一帯は富士箱根伊豆国立公園に指定されている。箱根外輪山の一つ「金時山」は、イノシシの鼻のように突き出た山容から、かつては猪鼻嶽（いのはなだけ）・猪鼻山（いのはなやま）と呼ばれた。箱根外輪山の中で、ひときわ高くそびえる「金時山」が、伝説の舞台です。国土地理院の発表によると、山岳標高の改訂で「金時山」は海拔一二三メートルから一二二メートルに。一メートル低くなった。測量技術の進歩だけでなく、地殻変動なども理由とみられます。



金時山の名前は、金太郎伝説にちなんで命名されたといわれ、足柄平野から金時山の山頂にかけては、数多くの逸話いっかわが残されています。

NHK総合テレビの人名探究バラエティー『日本人のおなまえっ!』で「渡辺」姓が取り上げられた時、「渡辺綱」と一緒に頼光四天王の一人、「坂田金時」も紹介された。

私は、富士山や金時山を毎日眺めて暮らしています。贅沢な暮らしです。童謡の会で「キンタロー」を歌った時、「金時山は、かつては猪鼻嶽・猪鼻山と呼ばれていました」と説明した。家から金時山を眺めるたびに「猪鼻」に感動しています。空を向いたイノシシの鼻のようなのです。

## 「とんび」の伴奏

みなさんは、「ペンヨロー、ペンヨロー」と鳴く鳶とんび（とんび）の声を聞いた事がありますか。鳶は、鶯（わし）や鷹（たか）と同じ猛禽類もうきんるいの仲間で、〈とび〉が正しい呼び方です。猛禽類の中でも、生きた動物をおそうことが少なく、魚や死んだ動物などを食べたり、ゴミとなった人の食べ残しを食べたりします。冬が来ても外国に渡らず日本に住んでいます。山と海がある真鶴には、沢山の鳶がいて、上空を旋回しています。

童謡や唱歌の伴奏は、ピアノまたはオルガン用に書かれたものです。由紀さおり姉妹がオーケストラが用意されていても、ピアノ伴奏で歌ったのはそのためです。ピアノ伴奏は高津佳さん。

ウクレレ、ギター、アコーデオン、大正琴、ハーモニカではなく、ピアノまたはオルガンの伴奏で歌っていた大好きなものです。

### 奇妙な歌「さらば、八戸」はちのへ

朝、Eテレ『0655』という番組で、ロス・プリモスが歌う奇妙な歌「さらば、八戸」を聴いた。作詞…うえ田みお、作曲…近藤研二。

「さらば」というのは、美雪さんに振られた森君は、フェリーに乗って行ってしまった美雪さんを自動車の運転席から見送り、失意の中で自動車を走らせトンネルを通り抜けると、そこは「九戸（くのへ）村」という土地だった。

「♪短い恋の終点で 去りゆく姿を見送るよ 美雪の髪が風に舞う 八戸港フェリーターミナル」

青森県に「八戸」という地名がある。「八戸市」は下北半島の付け根部分にあって、太平洋に面していて、日本でも有数の漁港があることで知られている。なんと青森県から岩手県にかけて「一戸（いちのへ）」から「九戸」が点在する。私は知らなかったので驚いた。

「♪もうこの街にも来ないだろう そんな最後の思い出に 見知らぬ道をひた走る トンネル抜けたその先に 八戸じゃないのね九戸もあるのね 八戸の先に九戸。一戸 二戸 三戸 とんで五戸 六 七 八 九戸」。

なに、この歌？ 歌詞の中に、「とんで」とあるのが気に入った。「♪ひたはしる」の「は」の歌い方は、ムード歌謡の歌い方でクラシックにはない発声だ。「九戸」は、色気のある完全終止だ。ロス・プリモスのボーカル、二代目・永山こうじさん、甘い声でステキです。現在のロス・プリモスは三人組。

・ 一戸 (いちのへ)	岩手県	一戸町	一戸町役場
・ 二戸 (にのへ)	岩手県	二戸市	二戸郵便局
・ 三戸 (さんのへ)	青森県	三戸町	三戸消防署
・ 五戸 (ごのへ)	青森県	五戸町	五戸駅
・ 六戸 (ろくのへ)	青森県	六戸町	六戸温泉
・ 七戸 (しちのへ)	青森県	七戸町	七戸町役場
・ 八戸 (はちのへ)	青森県	八戸市	八戸港フェリーターミナル
・ 九戸 (くのへ)	岩手県	九戸村	九戸神社 (おみくじを引く)

一から九までそろっているが「四戸 (しのへ)」は存在しない。

「♪青森から岩手にかけて 一戸から九戸が点在します。鎌倉時代からの土地の名で 四戸だけがないのよ 青森から岩手の一戸から九戸」。

「四戸」は、昔はあった。現在の八戸市の「櫛引」辺りが「四戸」だったのではないかと推測

されている。この地にある「櫛引八幡宮」が、かつては「四戸八幡宮」という名称だった。「櫛引八幡宮」の社務所によると、「以前は『四戸八幡宮』という名称で、神社に残る史料によれば正平二十一年（一一三六年）には確かにその名前だったことがわかっています」。その時点で「四戸」という地名は存在した。また「四戸がなぜなくなったのかについては、四戸という地域が細長く（為政者にとって）管理しにくかったからという話があります」とのこと。

◆「櫛引八幡宮」は、文治五年（一一八九年）の奥州合戦で戦功を挙げた南部光行が源頼朝から現在の「岩手県北部・青森県東部」に領地を賜り、建久二年（一一九一年）に入部、創建されたと伝わっている（インターネットより）。

四戸がなくなった時期について八戸市立図書館によると、「四戸という地名は、櫛引、また旧南郷村、旧名川町、旧福地村の辺りにありました。しかし、江戸時代初期に盛岡藩が行政区分を変更する際になくなった」。そのままずっと現在まで「四戸」だけ失われたまま。

私は、「しのへ」という読み方が、「四戸」がない理由の一つではないかと思えます。日本人は、アパートの四階など「四（し）」は「死（し）」と結びつくので嫌う傾向がある。

さらばシリーズは、「さらば、高円寺」、「さらば、豊橋」、「さらば、宝塚」そして「さらば、八戸」がある。私は、「さらば、八戸」が一番気に入っている。

平成二十九年十二月三十一日、Eテレ『2355・0655年越しを御一緒にスペシャル』で、

「さらばシリーズ第五弾」が発表になった。「さらば、下呂温泉」だ。歌詞には「上呂」「中呂」「下呂」が出て来る。

「♪岐阜県下呂市下呂温泉」「ふっと見上げた その先に 上呂もあるのね下呂だけじゃないのね 上呂駅」「上呂と下呂の間に あるのね ああー 中呂」「岐阜県下呂市下呂温泉 日本三名泉のひとつです(草津 有馬 下呂)」「上呂と下呂は奈良時代からの道の駅 中呂だけが あとからできたの 岐阜県下呂市の上呂 中呂 下呂」。歌はロス・プリモス。

ラストの「上呂 中呂 下呂」「下呂」の取って付けたような歌い方が気に入った。音楽大学での作曲ではありえないまとめ方です。このような曲を書くとき先生に呼び出されて「下呂」の部分は直されてしまいます。

## 縁起物の歌

『ふじの山(富士山)』は、「♪富士は日本一の山」と歌われ縁起のいい歌です。沢山の富士山の歌が作られた。日本人は富士山が好き。

初夢に見ると縁起が良いものを表すことわざにも最初に「富士山」が出てくる。「一富士(いちふじ) 二鷹(にたか) 三茄子(さんなすび)」。諸説ある。

・富士山、鷹狩り、初物のなすを徳川家康が好んだ。

・徳川家縁の地である駿河国での高いものの順。富士山、愛鷹山、初物のなすの値段。

・富士は日本一の山、鷹は賢くて強い鳥、なすは事を「成す」。

・富士は「無事」、鷹は「高い」、なすは事を「成す」という掛け言葉。

・富士は曾我兄弟の仇討ち（富士山の裾野）、鷹は忠臣蔵（主君浅野家の紋所が鷹の羽）、茄子は鍵屋の辻の決闘（伊賀の名産品が茄子）。

・江戸時代に最も古い富士講組織の一つがあった「駒込富士神社」の周辺に鷹匠屋敷（現在の駒込病院）があり、駒込茄子が名産であったため、当時の縁起物として「駒込は一富士二鷹三茄子」と川柳に詠まれた。など。

四以降についても諸説ある。「四扇（しおうぎ） 五煙草（ごたばこ） 六座頭（ろくざとう）」。

「一富士 二鷹 三茄子」と「四扇 五煙草 六座頭」は、それぞれ対応していて、富士と扇は末広がりで子孫や商売などの繁栄を、鷹と煙草の煙は上昇するので運氣上昇を、茄子と座頭（剃髪した盲目の按摩師）は毛がないので「怪我ない」と洒落て、家内安全を願う。

私が主宰する童謡の会の一月例会で、「ふじの山（富士山）」を歌うことになった。四以降は、知る人が少なかったので説明をした。私は、「一富士 二鷹 三茄子」と「四扇 五煙草 六座頭」は、『それぞれ対応している』という部分が気に入っている。自分の知らない事を学ぶのは楽しいものです。

## 悩める「浜辺の歌」

この歌ほど研究者を悩ませた歌はありません。原因は誰も初出詩を確認していなかったところにあります。

ある日、作曲をした成田爲三の故郷・秋田県北秋田市の『浜辺の歌音楽館』にある詩碑と、作詩をした林古溪が教師（旧・京北中学校国漢科）をしていた東京都文京区の京北学園京北高等学校正門突きあたりにある詩碑（昭和三十三年学校創立六十周年記念建立）の碑文が同じ平仮名である事に気づきました。

「浜辺の歌」の初出詩は、大正二年（一九一三年）の東京音楽学校学友会誌『音楽』八月号に「はまべ」のタイトルで三連まで掲載されています。

詩「はまべ」の一、二連は全て平仮名です。三連も赤裳、眞砂<sup>マナゴ</sup>だけ漢字で、赤裳にはルビはなく、眞砂にはカタカナで（マナゴ）とルビがふつてあります。ほかは全て平仮名です。最後に（作曲用試作）と添え書きがあります。

碑文には林古溪自筆の「はまべ」の一連が刻まれています。現在歌われている歌詞は、この初出「はまべ」の一、二連です。作詞者による幾つかの修正を経て、今の歌詞ができたわけではありません。また、現在の教科書や出版譜では、一番の歌詞が「風の音よ」となっています。この歌詞が定着しているのは、原詞どおりなので、当然の事です。

## 「あした」の二連

あした はまべを さまよえば、  
むかしの ことぞ しのばるる。  
かぜの おとよ、くもの さまよ。  
よするなみも かひの いろも。

ゆふべ はまべを もとほれば、  
むかしの ひとぞ しのばるる。  
よする なみよ、かへす なみよ。  
つきのいろも ほしの かげも。

### 美しい詩の構成

一連、「あした」は朝のことです。これを、「今日」「明日」の「あした」だと思って変な歌だと誤解する人が多いようです。論語に「朝（あした）に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」とある。一連は「朝（あした）」、二連は「夕べ（ゆふべ）」を歌っています。「しのばるる」は思い出される。

二連、「もとほれば」は行きつ戻りつする。「足元を掘る」と思っている人は意外に多いようで



すが間違いです。「ほしの かげも」は星の光も。

一連も二連も四行で、一行目と二行目が「七・五」、三行目と四行目が「六・六」の韻律。<sup>いんりつ</sup>「あした」と「ゆふべ」、「さまよへば」と「もとほれば」、「むかしの ことぞ」と「むかしの ひとぞ」というように一連と二連は対称的<sup>たいしょうてき</sup>になっている。

一連三行目は「かぜの おとよ」と「くもの さまよ。」、四行目は「よするなみも」と「かひの いろも。」というように対句の構成になっていて、二連も「よする なみよ。」に対して「かへす なみよ。」、「つきのいろも」に対して「ほしの かげも。」と対句<sup>たいく</sup>になっている。美しい構成で何も問題ありません。

## モデルの浜辺

詩のモデルになった浜辺は、林古溪が幼いころ藤沢に住んでいたことから辻堂あたりの湘南海岸を歌ったものと推定されています。

## 「はまべ」を寄稿

原作の「はまべ」は全四連でした。京北中学校（現・京北学園京北高等学校）の国漢科の教員をしていた古溪が、同時期に学んでいた東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）の学友会誌『音楽』に寄稿しました。

出版の際に作者に無断で三連の前半に四連の後半をつけた改作された三連が載せられました。

これが、東京音楽学校生徒の作曲のテキストとなりました。詩の最後に（作曲用試作）と書いてあります。作曲をしたのは、成田爲三、朝永研一郎ほか何人かいたようです。

### 「赤裳」の三連

はやち たちまち なみを ふき、

赤裳の すそぞ ぬれもひぢし。

やみし われは すでに いえて、

はまべの眞砂 まなご いまは。（作曲用試作）

※「赤裳の すその ぬれもひぢし。」

### 「眞砂」まなごにこついで

※は、後日発見された古溪が書き残した原詩です。「すそぞ」と「すその」では意味が違っています。三連は、疾風が突然襲って来て波しぶきを吹き上げ、赤い長衣の裾は濡れひたつてしまつた。病になつた私は、すでにすっかり治つて、「はまべの眞砂 まなご いまは。」「眞砂」のルビは（マナゴ）となつている。眞砂とは細かい砂の事で、永遠に絶えないものの喩としても使われる。今の自分を「はまべの眞砂」と表現している。ここでは、浜辺の寄せては返す波にさまよう砂のように、自分もさまよい続けるだろうという意味です。

### 安西愛子の見解

第三連後半二行と、第四連前半二行は、どのような詩だったのでしょうか。童謡歌手・安西愛子さんは、電話で次のように話されました。

「失われた三・四連には、古溪の恋人が湘南海岸で結核の転地療養をして元気になった様子が書かれていて、古溪の本当の気持ち織り込まれていたと思われます」。残念ながら「はまべ」の第三連後半二行と、第四連前半二行が残されていないため、その真偽を確かめるすべはありません。

### セノオ楽譜の出版

大正七年（一九一八年）十月一日、成田爲三の曲が竹久夢二の装画で「獨唱 濱邊の歌」セノオ楽譜九八番のピース（単発楽譜）としてセノオ音楽出版社から出版されました。出版の際、妹尾幸陽が手を加えた可能性があります。

### セノオ楽譜の三番

三、はやちたちまち波を吹き、

赤裳のすそぞぬれもせじ。

やみし我はすべていて、  
濱邊の眞砂まなごいまは。

三番の二行目は、「赤裳あかものすそぞぬれもせじ。」三行目は、「やみし我われはすべていえて、」となっています。四行目の「真砂」のルビは（まさご）に変えられている。文学的表現が手を加えた事により台無しになってしまいました。

セノオ楽譜の三番の歌詞の間違いについて、林古溪は誤植だと生前認めていました。教科書に掲載される時、三番が削除されたことが納得できます。

### 三番が重要な「赤とんぼ」

三木露風が詩を作ったのは大正十年（一九二一年）で、場所は北海道函館付近のトラピスト修道院。窓の外の竿の先に、じつととまっている「赤とんぼ」を見て、故郷の兵庫県龍野で幼い自分を背負ってくれた子守娘を思い出して、自分の事を書いたものです。

一番の「負はれて」については、勘違いをしている人が多いようですが、「追われて」ではありません。子守娘に自分が「背負われて」赤とんぼを見ているということですが、子守娘を「姐や」と呼びました。歌詞からは、「姐や」に寄せる信頼、ぬくもりが感じられます。それは、「いつの日か」の遠い幼児期の思い出です。

二番の「山の畑」は、露風の家の方、裏の山の畑に桑の木がありました。「桑の實」は初夏に赤くなり、その後黒く熟します。口に入れると甘酸っぱいプチプチした感じの小さな実です。

「姐や」はその「桑の実」を採って「小籠に摘んで」くれました。過去の幼少期の思い出は「まぼろし」のようになったというのです。

三番の面倒を見てくれた「姐や」は、十五で嫁に行ったと聞かされ、「便り」が途絶えました。結びの四番は、この詩を作っている現在です。赤とんぼが竿の先にとまっていたので、十二歳のころに作った俳句「赤蜻蛉とまつてゐるよ竿の先」を歌いこみました。

ところが、『五年生の音楽』（文部省）昭和二十二年（一九四七年）発行では、「十五で、姐やは、嫁にゆき、……」の三番を省略して掲載しました。

現在の婚姻制度では、十五歳の結婚は認められていませんので、三番がカットされ歌われない事があります。この詩は、起承転結になっているので、続けて四番まで歌ってこそ意味をなすものです。

三番には、少年期の露風の孤独や哀しみが込められています。露風の一冊書きたかった部分です。三番を削除してしまうと、楽しい思い出だけを歌った歌になってしまいます。この三番は、「赤とんぼ」がみんなに愛唱される重要な意味を持っているのです。今でも三番を歌わない童謡の会があります。聴いていて、大変気になります。

◆成人年齢を二十歳から十八歳に引き下げる改正民法が成立した。二〇二二年四月一日の施行予定。結婚できる年齢は、現行の「男性十八歳以上、女性十六歳以上」を「男女とも十八歳以上」に統一する。

作曲をした山田耕筰は、大正十五年（一九二六年）夏の日本交響楽協会の内紛後、東京市麻布区新網町から神奈川県高座郡茅ヶ崎町に住居を移していました。日本交響楽団（N響の前身）が分裂し、失意のどん底にいました。オーケストラ再生のために、茅ヶ崎町の家から毎日東京に通っていました。その汽車の中で、露風から贈られた詩集『小鳥の友』の中の「赤とんぼ」に目を留め作曲したといわれています。

楽譜には、昭和二年（一九二七年）一月二十九日と作曲日が書いてあります。『山田耕作童謡百曲集27赤とんぼ 三木露風作詞』（VOL・II。日本交響楽協會出版部刊、昭和二年七月十日発行）で発表しました。

◆「露風」の雅号は、「風」に吹かれてこぼれる、はかない「露」の美しさに心を惹かれて、その美しさを喜ぶ気持ちからつけたといえます。

## 全部歌ってこそ感動がある

### 旅姿三人男

歌は歌詞を全部歌わないと意味をなさない物が多い。平成二十八年十一月二十二日『歌謡チャリティコンサート』（静岡市民文化会館）で歌われた「旅姿三人男」は、三番まで歌わなければ、三人男の説明がつかない。一番は小政（こまさ）、二番は大政、三番は石松。時間がなくても三番まで歌う歌です。演歌歌手の福田こうへいさんが三番まで歌った。「おお、石松、とばされないで、

よかったね」感動してテレビに向かって拍手した。司会は、落語家の春風亭昇太さんと黒崎めぐみアナウンサー。次の紅白歌合戦の司会は、この二人がいい。オーケストラの編曲もすばらしかった。「管弦楽」セントラル愛知交響楽団。「指揮」藤野浩一。

### ざんげの値打ちもない

平成二十九年二月七日放送のNHK『うたコン』を観る。北原ミレイさんが「ざんげの値打ちもない」を、四番を入れて全部歌った。すごい歌だ。感動で言葉を失った。

私「今年の紅白歌合戦で北原ミレイさんが歌うといいね」

夫「それは無理でしょう。内容が受刑者の歌だから」。

◆北原ミレイさんは、昭和四十五年（一九七〇年）「ざんげの値打ちもない」（作詞：阿久悠、作曲：村井邦彦）でデビュー。昭和五十年（一九七五年）には「石狩挽歌」（作詞：なかにし礼、作曲：浜圭介）がヒット。当初「ざんげの値打ちもない」は五番まで歌詞があり、レコーディングまで済ませたが、四番の歌詞が先進的という理由でカットされ、その部分を省略して発表された。刑務所が舞台になっていることから三番の後の行動結果を暗示させた内容となっていることがわかる。

### 演じるように歌う

女優の大竹しのぶさんが「時代」を歌った。「♪まわるまわるよ 時代はまわる 喜び悲しみ

くりかえし」。そして、「歌は演じるように歌います」と言った。「なるほど、そうだったのか」。舞台で演じるように地声で歌った。

吉永小百合も浜田光夫も歌う。下手ではないが、橋幸夫や三田明のような魅力的な歌い方ではない。石原裕次郎も甘い声で、高倉健も洪い声で歌う。「映画の主演者はみんな歌う」と言われて緋牡丹のお竜さん（演・藤純子）も歌った。意気で色気のある歌い方は、映画にピッタリだ。

歌わなかったのは木枯し紋次郎役の中村敦夫さん。中村敦夫さんは歌が苦手なのだそうです。主演『木枯し紋次郎』の主題歌も、東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」も歌わなかった。

「終戦の年、東京の読売新聞本社が、米軍の爆撃で破壊された。その記者だった父は、家族を連れて出身地の福島県に疎開した。その後、福島民報の平支局長の職を得た。私はここで少年時代を過ごすことになった。」中村敦夫著『俳優人生』（朝日新聞社）による。東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」を歌う歌手やタレントの中に選ばれていたはず。

俳優の村上弘明は歌った。しかし、「うまい」と、ほめるほどではなかった。昭和十七年（一九四二年）生まれの民謡歌手・原田直之も歌った。同じ楽譜の「花は咲く」が民謡の節回しになっていた。

## 歌詞・歌い方を覚える

### とうだいもり

歌詞の読み方に注意したい。「とうだいもり」の一番の二行目の「よする小島」は、「小島」と



書いて（おじま）と歌います。力士の「小柳」は（おやなぎ）と読む。

◆「小柳」は、平成二十九年五月場所から四股名を改名して「豊山」。新潟県豊栄市（現・新潟市北区）出身で、時津風部屋所属の現役大相撲力士。身長一八五センチメートル、体重一七一キログラム。目標とする力士は元・大関豊山勝男（十四代時津風親方）。

◆力士の「正代」は、（しょうだい）と読む。本名だ。歌手の石川さゆりさんとは親戚同士。平成二十八年一月場所中に本人が「母方の祖母の兄の奥さんの妹の娘が、石川さゆりさんなんです」と話した。また、祖母の名前は正代正代（しょうだい まさよ）という。相撲が大好きなおばあちゃん。NHKの松村正代アナウンサーの前で、相撲の解説者のデーモン閣下が、「こちらは（しょうだい）とは読まないですな」と笑いをとった。相撲のゲストに箱根駅伝の優勝校・青山学院大学の原監督が出た。相撲の解説も新しくなっている。

### 早春賦

歌い方も注意したい。

一番「こえーもたーてず」

二番「ゆきーのそーーら」

三番「このーーごーろか」と歌います。難しいので練習が必要です。

Eテレ『にほんごであそぼ』でも歌われている。平成二十九年二月六日と九日は一番だけ、八

日は三番まで歌った。新しい編曲のため、古い曲が新鮮に聴こえる。

まってるね

少女歌手の小鳩くるみさんが歌いました。

二番は「おりぼん つーけて」

四番は「だっこを さーせて」と歌いました。かわいい歌い方が人気でした。小さな子が、歌詞を四番まで、よく覚えたものです。

牛若丸

「うーしわかまるはー」と歌う。

「うーしわかまるは」は間違ひ。

童謡の会員は、次第に年をとり、歌い方も自分勝手に歌うようになっていく。口から口に歌い継がれる童謡や唱歌は、歌いやすいように変化して行くものなのだろうが、あまりにも違った歌い方で歌い継がれてしまうのは残念です。

お猿のかごやく「小田原提灯」の歌い方

「おだわら」＋「ちようちん」＝「おだわらぢようちん」

「まな」＋「つる」＝まなづる

「やま」 + 「さくら」 || やまざくら

「みつ」 + 「はち」 || みつばち

「あま(い)」 + 「くり」 || あまぐり

「ほたる」 + 「ふくろ」 || ほたるぶくろ

「べに」 + 「はな」 || べにばな

童謡の会で、「へおだわら ちようちん」と歌っても間違いではありませんが、今日は「へおだわら ちようちん」と歌ってみましようか」と話していると、「ピコ太郎に聞いたら」という声があった。会場は爆笑になった。

◆「古坂大魔王」<sup>こさかだいまおう</sup>は、日本のお笑いタレント、DJ、音楽プロデューサー。平成二十八年には歌手「ピコ太郎」に扮して『ペンパイナッポーアッポーペン』(PPAP)を歌う動画が、動画再生回数一億回を超えるなど話題になった。シンガー・ソングライター「ピコ太郎」に扮し、ピコ太郎(本人)のプロデューサーと称している(インターネットによる)。

### 手を洗おう

手のひら 洗おう

手のこう 洗おう

指の間と

親指 洗おう

手首も 洗い

よく 流しましょう

★「きらきらぼし」の替え歌です。インフルエンザ感染予防の基本は手洗い。手洗いを楽しく習慣化しましょう（作詞・東京都健康長寿医療センター看護部感染対策委員会）。インフルエンザが流行っているので童謡の会で歌いました。大人気でした。

乃木坂46が歌う「インフルエンサー (influenca)」は、世間に与える影響力が大きい行動を行う人物のことです。

## オペラのように歌うか

### 冬景色

平成二十九年一月十七日、NHK『うたコン』を観る。ソプラノ歌手・森麻季さんが「冬景色」をオペラのように歌った。会場は拍手喝采だった。力んだので後半は音程を外して失速した。童謡や唱歌は、オペラのように声を張り上げる部分が少ないので、そうなる傾向にある。童謡や唱歌の事をわかっていない。

## 靴が鳴る

平成二十九年一月十九日、Eテレ『にほんごであそぼ in 高知』を観る。ソプラニスタの岡本知高（おかもと とまたか）さんが「靴が鳴る」をオペラのように歌った。聴いた瞬間、「おや、何の曲かな？」と思った。その歌い方は、それほど違和感があった。

岡本さんは高知県出身だった。「知高（とまたか）」は、「高知（こうち）」を逆にした名前だった。

さらに、オペラ歌手には珍しくコンサートで子どもたちと共演する。歌で触れ合うことをモットーにしている。音楽教師を目指していたという岡本さんは、ライフワークとして学校訪問コンサートや、各地の学生らとのステージ共演に力を注ぐ。

子どもの教育といえば、玉川学園や国立音楽大学の音楽教育、戦後の音楽教科書の執筆に取り組み、輪唱から日本の合唱を世界レベルに押し上げた「岡本敏明（おかもと としあき）」がいる。国立音楽大学の卒業生の岡本知高さんは、「岡本敏明」を尊敬して芸名を「岡本」としたのかもしれない。これは、私の希望的推測ですが。

現在（平成三十年一月）、岡本知高さんは『にほんごであそぼ in 大阪』に出演している。「北風小僧の寒太郎」を歌い、子どもたちに人気です。

◆童画家の武井武雄は、変わった人でした。岡谷には「イルフ童画館」がある。不思議な武井武雄ワールド、古い（フルイ）童画が集められている。

## 戦争の傷跡

小さい頃の思い出の中に、傷痕軍人の歌があります。足柄上郡松田町の小田急線新松田駅の東側には小川が流れていて、あばら家が建ち並んでいました。ムシロの上に白い服を着た足のない傷痕軍人が座り、帽子を差し出して物乞いをしていました。立っている人は義足でアコーディオンを弾きながら歌っていました。

父に、ポリシヨイサーカスや東京タワーを見に連れて行ってもらいました。ポリシヨイサーカスは、華やかで夢の中にいるようでした。東京タワーの下では、白い服を着た足や手の無い傷痕軍人が軍歌を歌い、物乞いをしていました。かたわらには、日の丸の旗がありました。子どもの頃、東京に連れて行ってもらった事は、世の中を見る目を育みました。

## 子どもたちに歌を

「歌は人生に潤いと励ましを与えてくれます。人生に歌がなかったら、どんなにか、それは殺風景なものでありましよう」（小原國芳の言葉）。

玉川学園の創立者・小原國芳氏は、『愛吟集』の序文（昭和三十八年七月）の中で、「教科書の標準曲数は一年にわずか三十数曲ですが、それだけしか与えられない子供たちはかわいそうです。その満たされない心が流行歌を追うという浅ましい現象になるのです。玉川学園で流行歌がきか

れないのは、それが禁じられているではありません。それに代るより楽しい、より美しい、より高い、より深いものがあるからです」と書いています。

「浅ましい現象」は言いすぎる気がします、「青少年に歌を！ 歌から、明るいまなざしと朗らかな笑顔が生まれる」というのは正しい。